

古墳ミステリー新聞

7D 共17 総
大津里

綿貫観音山古墳
6世紀後半の前方後円墳
全長: 97m
幅: 64m
高さ: 3m

綿貫観音山古墳 石室になぜ「モモの種」

古代の人々は桃をどのように扱っていたのか

「古墳に桃の種？」群馬県立歴史博物館の国宝展示室で、土師器の説明文を読んだ私は、驚愕した。古墳の石室から、土器と一緒に桃の種が見つかったとあったからだ。高崎市にある、綿貫観音山古墳で五十年前に見つかった埴輪や副葬品三三三六点が、二〇二〇年に国宝指定された。一四〇〇年前、土器を用いて被葬者へ桃などの飲食物を供えていたとある。今も仏壇に果物を供える習慣がある。それは古代から続く習慣なのか。桃には何か特別な意味があったのか。その意味をリサーチすることで、古代の生活を想像できたら面白いと思った。博物館史料本、インターネットで情報を集め、現在の私たちの生活との関わりも考えたい。

史料① 土師器 (はじ)



須恵器 (すえき)



事実

資料① 見つけた桃の種



が見つかった。そのほとんどが未成熟で、他に、神や祖先をまつる祭祀(さいし)用と分ける意図的に粉砕された土器、木製品、獣骨が見つかったため、桃は食料だけでなく儀式的供え物と考えられた。古い中国では、桃の実を「不老長寿」「魔除け」のシンボルとして、儀礼に使っていた。

事実

豪族の墓である古墳からは、生活の身近な道具の土器も多く見つかっている。

史料①によると、一九六八年に綿貫観音山古墳の横穴式石室から見つかった須恵器・土師器は、棺を置く玄室(げんしつ)に置かれ、同じ部分に桃の種も見つかった。

被葬者への供献(きょうけん)の儀礼は、中国や朝鮮半島の思想に由来するとあった。それは、どのような思想だろうか。

NHK歴史秘話ヒストリアの本と新聞記事によると、二〇〇九年に、卑弥呼の王宮だったかもしれない奈良県の纏向(まきむく)遺跡からも、二八〇〇個もの桃の種

解釈

複数の古墳から、またまた数の桃の種が見つかり、他の儀式用の土器などと共に置かれていたことから、卑弥呼の時代から桃が儀式に使われたと考えられる。それは、渡来人から須恵器を作るなどの技術だけでなく、桃や儒教などの思想についても積極的に受け入れたからだと思う。古代の桃は今の桃とかなり違うため、儀式用に栽培したのかもかもしれないと思う。

結論

古代の人々は、桃を安全や健康のためのお守りや薬として、生活に役立てていた。現在も、日本各地に桃を神としてまつる神社がある。桃仁は、漢方薬として知られている。私達は仏壇に桃を供えたり、室町時代に作られた桃太郎伝説や桃の節句の行事は、今も残っている。桃を果物として楽しむようになった今も、桃のミステリアスパワーを信じた考えは受け継がれ、私たちの生活に関わっている。



古墳や桃の種について調べた結果、古墳が作られた三〜七世紀の日本は、中国・朝鮮半島から様々な技術や思想を取り入れて国作りをしていた。古墳、須恵器、横穴式石室、修羅を作る技術、そして、桃の使い方だ。古代の人々は、桃を神聖な貴重品として扱っていた。卑弥呼の時代から、桃を儀式に使い、不老長寿や平和を祈ることで人々をまとめた。可能性も分かった。また、日本の神話や物語に魔除けとして桃が登場し、

史料② 横穴式石室



資料② 副葬状態復元 CG



横穴式石室と副葬品

六世紀に、古代の群馬県、上毛野(かみつけ)地域で、横穴式石室が作られるようになった。それまでは、古墳頂上に棺を埋める堅穴式だったが、五世紀に朝鮮半島から横穴式技術が伝わり、上毛野国は、東日本で最も早く作られた。

事実

観音山古墳の石室は、入口通路と玄室があり、全長約十二・六メートル、幅三・九メートル、高さ二・三メートル、天井の巨大石材の重さは六十トン。国内最大級の大きさ。(史料②)

解釈

古事記で、桃の実は「オオカムスミ」という神名を授けられ、物語にも魔除けとして登場し、種が薬としても使われたことから、奈良・平安の人々も、桃をお守りや薬として、安全や健康に役立てていたのだと思う。

神話や物語の桃

上毛野国は、他の東日本地域よりも五十年前、横穴式石室が作られ、巨大石材を修羅(しゅら)という木製の大型舟で運ぶ技術指導を受けたと考えられ、ヤマト王権が上毛野国を重視したと分かる。横穴式石室が導入されたから土器や桃の種が置かれるようになったことから、出入口ができたことで、埋葬後も定期的な桃を供えたかもしれないと思う。

引用・参考文献リスト

史料① 群馬県立歴史博物館にて撮影。史料② 群馬県ホームページより引用。資料① 日本経済新聞より引用。資料② 綿貫観音山古墳ガイドブックより引用。NHK「歴史秘話ヒストリア」制作(編)(2014)。NHK歴史秘話ヒストリア第2章 1. 弥生時代～金兼倉時代 編。群馬県立歴史博物館(編)(2020)。綿貫観音山古墳ガイドブック。群馬県立歴史博物館。群馬県文化振興課(編)(2020)。東国文化副読本 2020。群馬県。関裕二(2021)。マンガで読み解く真説・古事記。講談社。武井 正弘(2009)。日本の遺跡と遺産(2) 古墳。岩山奇書店。日本経済新聞 電子版 (2010年9月17日)。奈良・まき向遺跡で大量の桃の種。https://www.nikkei.com/article/DGXNASHC1701V-X10C10A9000000/ 2021年7月31日

